



2021年7月22日放送

学薬アワー 子どもたちの命を守るために～ASUKA モデルへの想い～

ASUKA モデル 関係遺族
桐田 寿子

桐田明日香の母親の桐田寿子と申します。職業は元看護師です。

現在は、家事・育児・ASUKA モデルの普及活動に専念しています。明日香の残してくれたメッセージを、母親として、皆様の心に届けられるようにお伝えできればと思います。

まず、亡くなった明日香のことを少し紹介したいと思います。桐田 明日香 11歳、桐田家の長女です。明日香の身長は、164.5 cm 体重 49 kg 運動会では保育園から小学校 6年生の徒競走で1位。マラソン大会も上位4位以内に入っていました。

看護師という仕事をしていたため、そばに居られない時間も多く、明日香には寂しい思いもさせてしまいました。それでも、明日香は、みんなの愛情をいっぱい受け、明るく元気いっぱい成長してくれました。

6年生のプロフィールに大切なものは「家族と友達」幸せなことは、「私が生まれたこと」と書くような優しい娘でした。

明日香は運動が得意でした。持病もありません。また、小学1年4年生に行われた心臓健診でも異常は発見されませんでした。しかし、悲しい事故は学校内で起きてしまいました。

2011年、9月29日、明日香は、駅伝の選考会で、1000メートル走の後、突然倒れ、けいれんを起こしました。救急車の要請は倒れてから約4分後、保健室に搬送されてからでした。救急隊到着時は心肺停止状態。救急隊が到着するまでの約11分間、AEDの使用を含む救命処置は行われませんでした。救急隊到着後、心肺蘇生が行われましたが、翌日、脳浮腫・多臓器不全の進行により明日香は永遠の眠りにつきました。

この事故には多くの教訓がありました。

学校の保健室に設置されていたAEDが使用されなかったこと。教員全員が3ヵ月前に救

命講習を受けていたにもかかわらず、明日香に、けいれん・苦しそうな呼吸など SOS のサインが出されていても、救命の行動につながらなかったこと。消防の指令センターによる現場の状況の聞き出しが十分にされなかったこと・・・などがあげられます。

この明日香の出来事は、決して特殊なことではありません。いまでもどこにでも起こりうることです。死戦期呼吸を心停止の兆候と判断し、救命処置を開始することの難しさ、AED を設置するだけでなく、いざという時に使える危機管理体制を構築することの難しさなど、市民による救命活動を普及させる上での課題を浮き彫りにした出来事だと感じています。

検証委員会の結果を受けて、私達遺族は、さいたま市教育委員会と共に再発防止のため事故分析を行いました。その再発防止策には、死因究明だけでなく「判断や行動での問題点」を明らかにした行動分析が必要と考えるようになりました。今回、私達を取り入れた考え方は、ヒューマンファクター工学に基づく分析手法でした。

この一般的に聞きなれないヒューマンファクター工学とは、主に航空や原子力などの高度な安全性を要求されるシステムにおいて、事故の分析から得られた知見をまとめた考え方です。この考え方は、現在、医療の分野においても広く取り入れられています。

分析に使用したアイム・セイファーは、医療現場で発生した事故を効果的に分析するための RCA 分析の一つです。ヒューマンエラーの視点を含む分析作業を経て、その結果作成されたものが ASUKA モデルとなる事故対策のテキストです。

意識や呼吸の判断に迷ったら、すぐに胸骨圧迫と AED 使用を促す行動チャートもテキストに入れました。AED は診断する機能を持っているので、間違って使ってしまうことはありません。AED を使うことで病状を悪化させることもありません。空振りしても OK という気持ちで AED を積極的に使用して欲しいです。AED は飾る物ではなく、使うものなのです。

再発防止策を考える中で、救命教育の授業が必要と考えるきっかけになったのは、明日香の友達の言葉でした。

明日香の友達から、明日香に付き添った担任の教員が 8 月に同じように心停止によって亡くなったサッカー元日本代表選手・松田直樹さんのことを、9 月の授業中に取り上げて「このような時は、AED を使うのよ」と自分たちに言ったのに、なぜ、明日香ちゃんに、先生は使ってくれなかったの？という強い疑問を持っていることを後日、聞きました。この話は、事故当時の教育長であった桐淵先生と、お会いした日に直接伝えました。そして、大切なお友達を救いたい思いは、子供達も強いのでは・・・そのためにも、目の前で突然に倒れた友達がいた時に何をすればいいのか・・・子供達にも救命の講習を受けることの必要性を話し合いました。その結果、2012 年の 4 月より政令指定都市では初めて、中学校から救命教育の授業を行うことになりました。

そして、さいたま市では、2013 年から小学校でも救命教育が導入されました。小学生で

あっても、誰かが倒れた現場に居合わせることがあります。その時に、倒れた人に声をかけること、大声で助けを呼ぶこと、AEDを取りに行くこと、小学生にだってできることはあります。誰かが倒れた時に何が出来るかを学ぶことで、命の尊さや友達の大切さを感じることもできます。

救命教育が、小学生から成長過程に応じて繰り返し行われることで、救える命を救える安全な学校、そして安全な社会がつくられていくのだと思います。

心臓突然死は1年間で約7万5千人と確実に増加傾向にあります。しかし、日本にはAEDが60万台近く設置されていても、誰かの目の前で倒れた人に救急車の到着前に、市民によって電気ショックが与えられたのは、わずか4.9パーセントにすぎないという現実があります。心肺蘇生は開始が1分遅れるごとに、救命率が1割ずつ下がっていきます。救急車到着までの平均時間は8.7分かかり、どんなに救急隊や病院の医師が救命治療を頑張っても、その場にいる人が、胸骨圧迫を行いAEDを迅速に活用してくれなければ救える命も救えないのです。どうか、誰かが目の前で倒れ、反応がなければ、

そして反応があるか無いか、わからない場合も、AEDを積極的に使って下さい。

明日香の事故を受けて、翌年の9月末に日本不整脈学会からも、心肺蘇生法を実施して、救命出来なくても、それで責任を問われることはありません・・・と、命を救うための緊急提言を市民に向けて発信してくださっています。

明日香の願う「みんなを守る学校」につながるように、私は、ASUKAモデルを全国へ発信すると共に、その場にいるあなたの勇気と行動が尊い命を救う力になることを、これからも、伝えていきたいと思います。

しかし、こうした活動をすることは、明日香の思い出が必ず伴い、思い出するのが辛いこともあります。今も、救急車のサイレンの音に、四季折々の行事に明日香の思い出を思い出し・・・急激な動揺を感じる自分もいるのも現実です。

それでも、これを乗り越えて、私の講演・活動を一回やるごとに、一人の子供の笑顔がもどるという気持ちで取り組んでいけたらと思っています。

今年に明日香が亡くなって10年目の節目の年を迎えます。ASUKAモデルによる救命事例が全国から多数届くようになりました。事故の分析を指導してくれた、当時自治医科大学教授だった河野龍太郎先生より、このような言葉を頂いています。

「重要なことは、救命された、その人だけでなく、その人の家族も悲しみから救ったということ。悲しいみんなの顔でなく、いつもの明るいみんなの顔が戻るということです。この差はとてつもなく、大きいと思います。そこに明日香ちゃんが生きているということです。教育が人の命を救い、また、人を育てるのですね」

明日香は、5年生の時、「たのしみは きれいな一輪の たんぼぼが わたげになって 飛んでゆく時」という短歌を作りました。

明日香の歌の表現を借りて伝えます。

私の講演のメッセージが、たんぼぼの綿毛と共に、想いという種として優しく飛んでいき、お話を聞いてくださる皆様の心に着地し芽を出し育っていくことを明日香と一緒に願っています。

ASUKA モデル、それは「みんなを守れる学校にしたい」という願い・想いの種です。この種を、皆様の心に届けられるように・・・これからも明日香と一緒に ASUKA モデルの普及活動を続けていきたいと思えます。

最後に、明日香が私より先に迎えてしまった死について、私の想いを皆様に伝えたいと思えます。人の死は、2回あります。一つは、心臓と呼吸が止まり、医師が判断するとき。

そして覚えている人が居なくなった時に2度目の死が訪れます。

9月30日は、明日香の命日でもあります、ASUKA モデルの生まれた日でもあります。

ASUKA モデルは、学校現場で活躍して、皆様に育ててもらい、改訂という形で成長していく性質をもつテキストです。ASUKA モデルの中で伝える明日香のメッセージは、皆様が、これからも、命を守る活動を進めていく中で、明日という未来に受け継がれていくと思えます。命を守る取り組みが続いていく限り、明日香には、2度目の死を迎えることなく、皆様の心の中に生きていくのだと感じています。

「救える命は救いたい」・・・その願いが、皆様の力で、叶えられていきます。

ASUKA モデル・・・その本質は、願いを共有する人のチームでもあり、皆様も、そのチームの一員だと思えます。

これからも、どうぞ、よろしく願いいたします。